



図25 「花寺」墨書土器

コラム1 「花寺」のお碗

沖ノ羽遺跡（秋葉区七日町・古田ノ内大野開）は、これまでに磐越自動車道や排水機場の建設、県営圃場整備事業などに伴って何度か発掘調査されている。九世紀後半から十世紀初頭（平安時代）を中心とする平野部の遺跡であり、集落跡と考えられている。

図は、平成十七（二〇〇五）年の調査で出土した墨書土器である。土師器の碗の外面に「花寺」と書かれている。「花寺」という寺院名と考えられるが、「法花寺」のような、三文字の寺院名を省略して記した可能性もある。沖ノ羽遺跡からはこのほかにも、浄瓶（仏前に供える浄水を容れる仏具）や仏鉢形土器（仏具の鉢に似た形の土器）、瓦塔（素焼製の三重塔ないし五重塔のミニチュア）といった仏教信仰に関わる遺物が出土した。

近年、千葉県や茨城県を中心として、古代の集落跡から、仏教信仰に関する遺物とともに、四方に底を付けた掘立柱建物の遺構などが検出され、そこが集落の中の「お堂」であったと考えられている。

沖ノ羽遺跡の集落にも「お堂」があり、「花寺」と書かれたお碗はそこで使われていたのだろうか。